

## 海藻の取り持つアジア多島域との交流

著者	野呂 忠秀, 寺田 竜太
雑誌名	南太平洋海域調査研究報告=Occasional papers
巻	49
ページ	27-28
別言語のタイトル	Collaboration on Marine Botany in Kagoshima University with Asian and Pacific Countries
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/10390">http://hdl.handle.net/10232/10390</a>

## 海藻の取り持つアジア多島域との交流

野呂忠秀・寺田竜太  
鹿児島大学水産学部

### *Collaboration on Marine Botany in Kagoshima University with Asian and Pacific Countries*

NORO Tadahide and TERADA Ryuta  
*Faculty of Fisheries,  
Kagoshima University*

#### Abstract

Since the 1960s, academic collaboration on marine botany has been conducted in Kagoshima University. Emeritus Prof. Tsuyoshi Tanaka did taxonomic studies with Vietnamese marine botanists in the 1960s and reported several new species from South Vietnam. Former Director of R.C.S.P. in Kagoshima University, Prof. Inoue Akio, studied fish poisoning, also called Cigatera, in Tahiti, French Polynesia and found that the dinoflagellate *Gambiediscus* produced the toxin. Afterwards, this dinoflagellate was also reported in many Pacific countries. In the 1980s, Prof. Noro started the taxonomic and ecological studies on brown algae genus *Sargassum* in the Philippines and extended his study in Australia, Indonesia, Thailand, Vietnam, Malaysia and Micronesia. Dr. Terada also collected many specimen of *Gracilaria* in Hawaii, Vietnam, Thailand and Indonesia, and is now revising the taxonomy of the genus. In the Pacific countries, *Gracilaria* and *Euचेuma* are economically important algal fishery products. For example, *Euचेuma* is exported as a source of the marine colloid named carrageenan. The Culture of *Euचेuma* is one of the important fishery industries in these countries. The Indonesian Ministry of Education nominated Kagoshima University as the counterpart for the training programme of the marine botany and other fishery sciences for the vocational high school teachers in their country.

海藻類は陸上に生育する植物と異なり、普段我々が直接目にするものがない植物である。日本では古くから海苔やワカメ、コンブなどの海藻を食品として利用して来たが、それ以外にも多くの海藻類が全地球規模で生育しており、光合成による酸素の放出（二酸化炭素の吸収）や食物連鎖の基礎生産者として、海洋生態系上重要な役割を演じている。鹿児島大学水産学部においては1960年代に故田中剛名誉教授が南ベトナムに滞在し海藻相の研究を行い、多くの新種も報告している。また、その後、田中剛らは、フィリピンのルソン島北部にかごしま丸で調査航海を実施、海藻類を採集した。その縁で、フィリピン大学のコルデロ氏が大学院生として来日し、学位取得後はフィリピン国立博物館の隠花植物部門の研究者として比国の海藻相研究に貢献した。

その後、井上晃夫鹿児島大学名誉教授（元多島圏研究センター所長）は顕微鏡的な大きさの海藻である渦鞭毛藻ガンビエディスクスがタヒチ沿岸のシガテラ魚毒の原因であることを東北大学の研究者とともに発見し、その培養と栄養要求に関する研究を1970年代に行った。

JICA専門家としてフィリピンの水産学校に1年間滞在した野呂は、フィリピン国内の海藻、特に褐藻ホンダワラ属の分布や分類を研究するとともに、その後は、文部省海外学術調査や拠点大学プロジェクトにより頻繁にフィリピンを訪れ、海藻類の分布を調査してきた。また、鹿児島大学は1998年から5年間、マレーシアでマラッカ海洋研究所の設立と支援を行ってきたが、その際には、海藻の分布と生育環境に関する研究が野呂らによって行われてきた。さらに、寺田は2000年以降、ハワイ、インドネシア、タイ、ベトナムや南太平洋諸国で、紅藻オゴノリの分類と生態に関する研究を行っている。

これらアジアの諸国では海藻類への関心は大きく、例えばゲル化剤として食品業界に不可欠なカラギーナンを抽出するための紅藻キリンサイはフィリピンで大規模に養殖されており、現在フィリピンの水産物の中では輸出額のトップの地位をしめている。このキリンサイの養殖は技術的に簡単であることが、FAOも発展途上国の漁村での養殖を推奨しており、インドネシアの水産学校ではその養殖技術の移転を望んでおり、さらにインドネシア文科省は水産高校教諭の海外研修先として鹿児島大学を選んできた。